



1161
3



昔語寶屋庫卷之三

東都

曲亭馬琴演

依藤太少龍宮入の弓袋の下

弓袋のこぶさへて聞んとつりのまうふ精はして。ちうちうちうちうち
 茶と喫し襟かたのひて組る海と小膝扇を衝らるる。童の弄物婦人
 衣裳のりぬとも小燈燭の下小居よらんとして。席のすむ衣あふごりる。
 當下弓袋聲とありまを彼秀御ぬが湖水る龍王の為小村て殺せ
 といふ巨蜈蚣のりぬ取て世俗附會の説とひ。件の蜈蚣ハ近江の三上山を。
 七圍半ちたふり三上山ハ石部と草津の間六地帯と唱る村里入。二十町
 ちうちうちうちうちの山の巔の四つある池あり。又藤小巖穴あり。崑門ハ僅小
 二尺たうりるまこと内と究めて廣一。一名を蜈蚣山といふ。いまも蜈蚣まうり

寶屋庫卷三

不経のりつをらるるものさるるものといひ。五雜五雜又一説あり。奔北
 記といふもの。平昌城といふと云ふは井あり。その水荊水と通る。神龍
 有てこまより出づ。故に龍城と名つくとり。厩確厩確りその書は我ら如く。
 堀抜の井戸をさうら。龍城と名つけん。湖水の中といふとも。龍宮あり
 へ経ぐけき。件の博士が評せしむ。龍はよろづ人と異なる。果して
 人とおかたからむ。その居も亦必。人間にある所の宮殿樓臺あり。おれ
 べうらび。まづ小秀郷朝臣の到りといふ龍宮城。瑠璃をりて沙は。金玉
 とりて秘名と。朱門高樓帝王の宮殿小勝うるといふ人間と異なる。は
 おり。は湖水の神龍が。形状と変じて小男となり。秀郷ぬ。派遣せし。と
 りるれば彼宮殿も。真の宮殿あり。又浪をりて水の中をり。五十餘
 町とさひも。実ハ水中あり。あつて人り。水中に没てえり。たつて必死を

といふもの。龍王の神通ふりて浪を投て。湖水と陸のていさ
 正ありとも。数日早乾とふあり。泥土深くして渡りかたう。まづれは
 樓閣も水中も。まづ假物あり。狐狸のいと魅よ。異なる。まづれは
 秀郷朝臣ハ武勇も。只碎客。癡漢うん。狐狸はまづれ。まづれ。
 世は虚気する人といふ。秋秀郷朝臣ハまづれ。龍王の仇と。まづれ。
 蜈蚣を殺て威風あり。龍王神通自在ありとも。つづてまづれ。魅よ。まづれ。
 彼龍王もまづれ。湖水の浪をりて。五十餘町あり。まづれ。まづれ。
 へ振く渡りう。かまづ。夫海底に龍宮のありといふ。まづれ。智ある人ハ信と
 せ。況て湖中小宮殿樓閣あり。まづ。世俗ハ只耳を信て目といふ。まづれ。
 後の傳り物語あり。まづ。まづ。の取まづ。ありても。まづ。まづ。まづ。
 そのまづ。まづ。原仙物語あり。まづ。初よりまづ。まづ。まづ。まづ。小説ハ是非と

蔣武
白象
の馬
巴
を射
る
ころ



蔣武

猩
起

白象



白象

豹るんと射る毎小弦は應ど感覽とびとひのほかくて一矢
 忽地は門と叩くものあり。窓より見え。一の狸。白象と誇りて
 才と。蔣武素より狸のうりのひとまうてけは生てその故を問ふ
 握。答て。象の大きなる怨のゆ。コダうりのひとまうて怒。これと
 負ておる。その執意と速よと。この山の南二百余里ありといふあり。あ
 巖穴あり。その中小巴蛇の長は數百尺あるあり。その眼は電光のま。その牙
 ハ利劍のほ。若家のま。つと。過るものあり。成。呑噬。既。數
 百疋よ及べつ。今君がうく射るとあるな。この慈所と抵。願。これが
 撃と射て。の慈を除さる。長く高息と忘。といふ。時。象は跪。て
 坐。小洞と決さう。握。又。のひ。君。の。と。象。小。誇。り
 の。その。せ。蔣武。す。て。感激。毒。と。り。矢。小。淬。象。小。誇。て。せ。く。行。く。

といつる。山の巖の下。あ。の。光。あり。て。數。百。歩。の外。小。散。徹。を。握。これ
 を。指。して。巴。蛇。の。目。あり。と。す。も。蔣。武。を。う。り。小。矢。刺。ひ。う。り。引。て。矢。と。射。る。小
 一。發。して。その。目。と。射。貫。さ。る。象。は。忙。しく。蔣。武。を。負。て。奔。り。避。る。は。大。蛇。と
 穴。の中。より。轉。歩。す。苦。む。と。限。は。か。の。教。里。が。間。の。林。木。焚。き。か。如。く。覺
 たり。さ。え。且。しく。穴。の。側。は。往。て。窺。る。小。巴。蛇。は。既。に。死。ん。ど。象。の。骨。積。て。山
 の。如。し。浩。如。は。象。豕。聚。ま。る。と。の。鼻。と。り。て。紅。牙。を。捲。き。て。ま。ま。と。を
 蔣。武。に。獻。ま。す。蔣。武。は。喜。ぶ。象。牙。を。擣。て。家。より。う。り。大。小。資。産。を。有
 ぬ。と。り。て。是。ハ。山。海。經。小。巴。蛇。と。象。と。食。ハ。三。歳。あり。骨。と。出。と。といふ
 小。卒。を。て。仰。り。出。せ。物。語。ハ。ハ。ま。ま。由。也。と。も。象。ハ。の。ひ。う。り。と。い。ふ。よ。

狸。を。備。て。い。ふ。と。い。ふ。と。死。ハ。大。に。強。あり。且。二。百。餘。里。六。町。一。里。十。二。百。餘。町。の。山。中。
 又。到。り。が。た。所。あり。あ。の。この。蔣。武。を。秀。卿。朝。臣。と。す。象。を。慈。と。握。く

と龍の小男不化(ふけ)う。巖(いわ)穴(あな)と湖水(こすい)と。矢(や)小毒(せうどく)と淬(すま)せしめと。漢(かん)不啞(ふえ)と吐(つ)けけうと。泉(いづみ)牙(が)と巻(ま)指(さ)儀(ぎ)撞(つ)大(おほ)刀(やいば)遣(や)あしく龍宮城(りゆうきやうじやう)一條(いちじやう)の物(もの)緒(いと)は解(と)けりくえするふし。まじきも湖水(こすい)の底(そこ)へ人の往(ゆ)きまじき。これらねば前(まへ)の小説(せうせつ)よりみれば詳(こま)か見(み)ゆ。つと浅(あ)くうまの事(こと)も。能(よ)意(い)る死(し)かへあはれ。秀(ひで)郷(きやう)朝臣(あそ)へ左大臣(さだ)藤原朝臣(ふじわら)魚名公(うなな)の五男(ごなん)從四(じゆ)位(ゐ)下(げ)伊勢守(いせのり)藤成朝臣(ふじなり)の曾孫(そそ)あり。藤成(ふじなり)の子(こ)下野(しも野)權守(ごんす)豊澤(ゆづ)その子(こ)下野(しも野)大掾(おほのり)村雄(むらゆ)。その嫡男(ちやくなん)從四位下(じゆじゐげ)下野(しも野)押領使(おしりやうし)藤太(ふじ)秀郷(ひできやう)母(はは)下野(しも野)掾(のり)鹿嶋(かじま)が女(むすめ)あり。秀郷(ひできやう)その下(した)め。下野(しも野)の田原(のら)といふところあり。居(ゐ)ぬひくふ田原(のら)藤太(ふじ)と稱(なづ)ぶ。藤太(ふじ)といふ藤原氏(ふじわら)の太郎(たろう)と畧(りやく)なり。或(ある)は大和(おほ)の田原(のら)より生(な)まるといひ。近江(おん)の田原(のら)と領(りやう)し。これらともいふ。諸説(しよせつ)一定(いちてい)るべし。秀郷(ひできやう)の子(こ)田原(のら)千春(ちゆ)藤原(ふじわら)へ何(なに)もの書(か)きも田原(のら)

とのと書(か)けて儀(ぎ)と書(か)くると見(み)ねば地名(ちやうめい)あるはハ(は)がらむ。田原(のら)と儀(ぎ)不(ふ)書(か)へ字(じ)と借(か)りて儀(ぎ)と稱(なづ)ぶ。不(ふ)注釋(ちゆせつ)せんとも。件(くだん)の蔣武(しやうぶ)がことと多(おほ)く。くさ。龍宮城(りゆうきやうじやう)の怪談(かいだん)を述(の)ぶ。まじきども儀(ぎ)の和訓(わく)たつらとハ。たらたらとの義(ぎ)あり。米(こめ)を畧(りやく)むとらう。あはれは。又(また)米(こめ)と畧(りやく)巻(ま)き述(の)ぶ。とらうと和名(わな)せん。手束(て)葉(は)の畧(りやく)あり。まじきども。つとこの比(ひ)より。借(か)りて儀(ぎ)の和訓(わく)と。手束(て)葉(は)又(また)當(あ)て。字書(じゆ)は儀(ぎ)へ。悲朝(ひ)の切音(せつおん)儀(ぎ)散(ち)るうとあり。こととたらとらうと和訓(わく)と畧(りやく)とらうと。唱(な)るるのべし。かまじ手束(て)葉(は)は。儀(ぎ)の字(じ)と當(あ)て。むじの人の恨(うら)まふ。又(また)田原(のら)の假字(かり)小(こ)子(こ)束(た)葉(は)の義(ぎ)とらうても。むじとらうとの假名(かり)らひあり。と。この儀(ぎ)といふ苗字(なな)と物緒(ものいと)の主(ぬし)人公(ひと)あり。巻(ま)指(さ)大(おほ)刀(やいば)遣(や)撞(つ)撞(つ)と獲(と)く。財宝(さいほう)金(かね)は充満(ちゆうまん)。衣裳(いさう)との身(み)ふあまじと解(と)けり。ハ秀郷(ひできやう)朝臣(あそ)天慶(てんけい)

小貞盛ゆて翼て將門を討滅し。弓矢をりてその家と與へれば。大刀遣へその武を表し。巻絹米俵へ衣食と子孫小傳とを表し。撞鐘へ武者四海を鳴るはと表し。あつまば原寓言とくども。他意あるふあつむ。世俗の常流へ批する小足なねど。正史とくども。小説と収めるあり。むじの人も只末とのを尋て。その本を究めど神代巻不倣てや一書おも亦秀御朝臣の龍宮小入りて注し。この後人の追書するものらん。さればるれと書つけは。可情う袋ふれ衣を不彼よるとて秀御ぬも冥土あ。さぞを憂くお不さめ。と多ひあまじ長物語ゆ。そやそふいあり。誰ゆめめ代々の人。とひりけて引退けど。袈皆中と散動ゆえり。

第六 石堂丸高野詰の脚絆

石堂丸高野詰。さびし感嘆して鳴ゆ己む。従書が引く。訛と辨して。身のぬき衣とひききも。さ右へハがじと衆皆面とあつら。講坐へ推處のりのるし。見臺先生左右とえり。ひびひる徒を。夜をこやい深く。深さるる。て推諫あつら。十三番目の古衣棚。蹴揚の泥の乾干。さハ世の人口小膾炙する。如藤左門尉重氏入道の嫡男。石堂丸の脚絆。さるる。さるも重氏入道。筑紫小名。さる武士。しが。妻と側室。さ。對ひて。假寝さるる。を鬮鬮。ま。西個の婦。か黒髪の小蛇。とがりて。喰あ。は。驚嘆し。外面如菩薩。肉を如夜叉。と忽地。悟る。不二法門。これ善花のた。は。所領の地。を棄。妻子を捐。恩愛。恋慕の絆。ととも。は。髻。非。と。勇。さ。ひ。て。高野山。へ。け。登。り。山。蓋。道。と。法。号。して。塵。を。避。迹。を。埋。め。只。願。仏。は。事。る。戒。牙。の。勢。と。志。の。人。ハ。妻子の愁嘆。大。う。さ。ら。ら。と。腹。

子に於ては家諱の時を以て不奸計、蕙蘭繁らんとす、されども凡
 の為は破れ、泊船静るらんとす、浪の為は洗きて、その子々
 家と嗣よりあく、その妻の室を守り、遂に他人は横領せむ、事の
 為体と論ぶ、重氏一城の主とて、婦の妖怪とて、驚き怖ま
 妻子珍宝及王位、臨命終時不隨者と大集經の一句と耳、妻子
 と棄、城地を捐、俄頃小出家入道、高野山へ徳ま、の仏魂より、
 と死へつと有り、死道心る事、先祖の為、其死不孝といへ、
 凡縁の母、女小ら、その子は嗣、その孫は傳、五椿の八千代中、
 の地を天され、官位俸禄、親も倍せ、とあり、人の人情、
 家とる時、あく、怪死とて、怪しむ、狼狽て、頭髻と剪、妻を
 子に、女に、その成長、候に、二人の主の馬が狂ひ、出せば、その尾

小舟、親族妻子、老黨、入、意の馬が狂ひ、出、家難、大、
 多、れ、ど、も、幸、あ、り、て、内、室、ハ、標、正、し、石、堂、孝、心、深、く、
 一、個、の、徒、者、は、扶、引、を、幸、と、彼、灵、山、
 へ、卦、ふ、内、室、ハ、と、積、る、お、ひ、と、長、途、の、疲、勞、は、病、卧、て、終、
 り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
 索、と、び、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
 志、と、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
 年、來、の、不、和、を、遂、悪、人、と、す、討、亡、く、絶、る、家、を、與、せ、
 物、語、五、鏡、經、の、上、に、お、り、三、尺、の、量、と、り、口、吟、と、
 志、れ、ど、も、の、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
 親、子、地、を、と、り、既、古、蹟、を、遺、り、れ、ば、世、は、
 既、古、蹟、を、遺、り、れ、ば、世、は、

虚実丁をさぐりてはゆけし。出させぬと手とらうて。入りめく。席はおし
 居る。石堂丸の古脚絆へ。迷惑さへは又を撥き。ワガ名をば石堂丸脚
 絆脚絆と鳴るとぞ。全ありて。川童法師の。一子ありゆへ。原へ筑紫の
 の向水郎を思ふ。石之助といふ。九歳の。とた親は捨たり。叔父
 の由縁。よさうくと。大和の五條へ。出奉。公十年の。年季を半勤し。十三といふ
 春の季。瀬波の金毘羅。おがまんとして。密に主の家を脱出し。れど。ちや
 紀伊ふと。路費を失ひ。家頭山へ。いぬ由。糸を以。愚癡くら。高野へ。糸清
 きたり。いづこよ。ゆり。糸。備。華ふ。あご。も笑。つ。或ハ。高野山。と。俾。名。ら。
 又石之助といふ。ゆり。石堂丸と。鳴。む。行く。む。奴。方。ある。人。い。いと。苦。く
 きたり。あ。ら。して。某。が。穿。つ。る。脚。絆。へ。石。堂。丸。が。す。せ。踏。踏。は。二。高。野。山。に。う。る
 紙牌。と。つ。け。人。と。ある。とも。憂。族。の。憂。う。し。と。と。忘。る。る。と。叮。嚙。に。教。訓

ま。く。ゆ。づ。う。ら。こ。ま。と。敢。萬。難。の。底。へ。務。め。て。あ。り。し。か。年。に。行。く。隨。人
 中の。も。冥。途。の。様。は。對。さ。さ。と。う。ま。ば。変。る。世。の中。小。縁。故。を。さ。う。り。あ。り。ま。く。
 遺。る。脚。絆。と。紙。牌。を。え。く。好。う。の。徒。跡。を。す。し。これ。ら。え。ん。に。石。堂。丸。が。
 高。野。清。の。脚。絆。あり。と。て。紫。帛。紗。を。ち。り。く。二。重。宮。へ。入。ま。し。り。り。
 價。貴。く。る。り。糸。壓。の。各。位。と。ひ。と。ろ。質。庫。は。膝。と。た。め。奴。僥。倖。倖
 ら。し。と。不。幸。也。和。と。い。ね。バ。理。と。ある。う。ら。の。世。の。常。言。也。今。ど。身。ふ。み
 あ。ら。さ。る。讎。悔。話。説。面。自。ら。と。い。ひ。も。終。じ。遠。巡。と。ま。し。バ。背。負。さ。め。さ。へ。ど
 吐。と。笑。ひ。り。り。当。下。見。臺。先。生。へ。眉。と。よ。せ。改。を。傾。け。毫。も。彼。が。い。ふ。こ。い。世
 小。秘。え。る。古。器。の。ん。ど。よ。か。る。清。悵。へ。つ。た。も。あ。る。と。こ。な。由。て。彼。を。あ。み
 ぶ。重。氏。法。師。の。物。う。ら。も。世。は。他。が。ど。く。む。く。あ。い。じ。あ。る。人。あ。ら。バ。説。あ。じ。て。世
 と。さ。る。め。り。と。い。ひ。つ。坐。上。と。ん。と。せ。バ。臘。塗。の。管。に。蒔。繪。を。淺。黄

痛循の衲ふ坐する。水晶の珠数々も生ず。呵々とうら笑ひ出家する
 身のりのくく。その虚実と論げんハ嗚呼が中た所為るれど。その
 迷ひと解ざらんも。痛痛けしむ。己とをゆるぎ。大人気あくも生る。己ハ
 一遍上人の遺物ぞ。彼上人の一生涯ゆみふまわりのけり。くべ。その世のこのいふも
 さう。往古の道德とらの。くせとよく志す。彼説経はゆ。く。く。
 加藤左衛門尉重氏入道。萱と長。洛打る。物うらハ。か。主と憑こ
 なる。一遍上人悟道のと。祈親法師が高野詣と。此彼撮合。く
 けり。出せ。中茶の小説。その淵源を尋ね。久明親王謙念の將軍
 ぞ。北條貞時執権と。ころ。伊与國の住人河野通廣が二男。小
 別府七郎兵衛尉通秀。といふ。武士のり。り。通秀あると。其妻と妾とが
 双六盤碁盤と。枕小作と。改と。合と。臥と。か。その髻。小蛇とあり

て。嗟あふと。出家して。諸國を修行して。智真坊と号と。徳の究て
 高かり。道俗よく敬信と。一遍上人と稱し。う。かくて一遍上人ハ
 伏見院正應三年。秋八月廿三日。摂州兵庫の観音堂あり。近化
 志のひり。享年五十一と。縁起見え。その別府通秀入道
 子。石堂丸が。ひさ。高野山へ。け。登りて。父と索し。う。を。け。出せ
 へ。祈親法師が。と。取と。元亨。釋書卷之十四。小。釋の祈親ハ七歳
 あり。父と喪ひ。十三歳あり。奥福寺小入。て。相宗と。受。り。時よ。その
 母の疾。と。危。き。よ。う。て。落。髪。と。ま。つ。ま。ど。母の病愈。と。遂。よ
 む。ほ。く。の。り。ふ。け。と。バ。偏。は。法華經。と。持。念。と。又。母の冥福。と。薦。し
 へ。祈親と。呼。び。し。かくて祈親ハ六十といふ。と。小。忽。地。ふ。あ。ま。り。ま。る。

七ノ五ノ三ノ二ノ一

ト

二親不幸ゆく世と早くも人もども子といふりのハコ外ふしり
 又母後世の苦樂とあはれハ孝子の誠といふべしと殊志と勵
 まつ。かて長谷寺に系清して通夜して七日よりあはれども第三夜の
 爰中より人ありて告ていふや。汝又母の生れをあらんとあはれども高
 野の金剛峯へ到るべしと教る。祈親爰あて。あはれび天の昭るせ
 侯て紀州へといそむ。河をさく高野山へ来り小たり。弘法大師の
 山と関きこもひく。さよ八十餘年。堂宇既頽廢して荆棘路を塞
 且るで厭ひ幸と塔所は到る。又祈す。とをあらはさる。かじ行ふ。
 有一日觀史の内室はあはれ。庭上は三莖の蓮花ありて菩薩ののく。
 二ツの花の中は坐り多し。三ツの花のひらき。祈親拜す。菩薩前
 へ。菩薩の名号を問ふ。と答ふ。二大士の汝が又母なり。

このは是汝が年法華経読誦の感應とあらざらん。この関する一ツ
 花の汝が坐する如くと教る。いふ祈親の感涙を拭ひあはれ。さしてハ念
 願成就し。と頼めて。直は山は苗り。勸めて荆棘を伐たし。いとこく
 修造を加へ。莊嚴をなす。さよ。山は再興の實は
 祈親が力ことなり。さよ祈親が七歳ゆて又を喪ひ。十三歳の時母も没
 せん。後生の苦樂とあらんとす。法花經の持者とありて。祈親と名
 小鳴。年経て高野山へあけ登りて。又母成仏の瑞相と見え。といハ元亨
 釋書の説と密小写く。と石堂丸が又と索て。いと。さよ。母の
 名と石堂と名つけ。祈親法師が塔所は到りといふ。さよ。秋河
 野の孝天皇の後胤。姓ハ越智。又加藤ハ法守府將軍利仁



石堂母



高野山
石堂丸
又と索るところ

の後胤あり。藤原氏あり。利仁の孫吉信加賀守不任せられし。藤原の者不。加賀の如の字と冠て。子孫加藤と号し。その家亦異る。又彼重氏入道と刈萱道と名つけし。筑紫の地名小倉ありて。菅家の父の号のころと名ひし。新古今集小菅原大政大臣刈萱の園守ふの。ええつる人由あり。道べる。刈萱の関ハ筑前小ありし。入由ゆらぬ。らべと稱せし。ひし。本つれて。刈萱道が。その子石堂丸と名り。名告あり。下。成り。かれば。物語の又母より。祈祝法師と一遍上人の。の。あ。何。既。その淵源と論辨する。石堂丸の脚絆といふ。の。世。ある。べう。あ。彼刈萱の親子地。別。所以。ある。や。好事。乃。の。亦。為。る。や。それ。の。考果。さ。昔草紙物。と。を。の。

あまのふ哀とよ。又。却人情と。失ふ。や。出家人。とも。その子。い。孝。あ。と。素。つ。不情。名告。あ。て。つ。物。あ。の。と。真。の。出家。と。い。彼。西行。法師。年。を。経。て。妻。も。名。告。遣。ひ。その。女。児。と。共。も。住。り。又。流。書。見。基。子。の。論。も。ひ。所。領。の。地。を。捨。妻。子。を。捨。て。出家。人。と。る。と。い。は。の。為。小。忠。臣。の。も。先。祖。の。為。少。不。孝。と。い。は。是。儒。の。道。也。遮。莫。仏。法。の。子。孫。因。絶。を。宗。と。て。生。涯。を。食。す。の。の。ら。れ。仏。の。道。へ。入。ん。の。妻。子。と。い。は。爵。祿。は。著。さ。ぶ。や。形。狀。ハ。僧。あり。と。も。い。は。大。俗。か。の。と。い。あ。く。得。道。世。の。を。穿。つ。と。西。行。上。人。在。俗。の。目。出。家。せ。ん。と。い。は。さ。あ。ふ。僅。は。三。歳。の。り。ける。女。児。又。の。膝。に。携。つ。抱。え。ん。と。て。這。よ。れ。ば。い。ふ。あ。ふ。よ。く。覺。え。て。ま。じ。し。ら。の。終。る。が。倍。と。い。は。さ。あ。凡。出。家。の。志。を。遂。え。

在りて

一日

盛衰記
小高倉
院中在位
の一人
建礼門院
小二人の
筆者あり
横笛川
菅とまは
共と容
色あり危
まに刈
草と人の
名はまが
とまゆ
とまえ
とま

る。まづ愛惜の絆を断じ、真の道へ入り、ついでとて、嬰兒を地上に投
退け、難ぞ家をやらる。走利火宅中の人こそ、是をそくの人情ありと
笑ふべけれど、仏の教は後る死を貴しと、又儒の教は後る死を不孝と
と。彼を辟瘴するとかくのむ。されば、その年を経て、その子、小名告あり
と。真の生家といふ、そのあひ、彼、齊、後、時、我、法師が、嵯峨野の、奥へ
隠し、疾、美女、横笛が、尋ね、来つゝ、不達、せりと、刈、蓋、法師が、その子、
名告の、あは、と、いふ、物、語、の、日、を、お、ひ、く、と、論、じ、と、南、无、阿、彌、陀、仏、と、
説、め、く、バ、聴、り、の、お、の、く、合、掌、し、て、南、无、阿、彌、陀、仏、と、應、じ、る。

第七 平将門 衣龍の製束の上

浩處、上坐する。鬮をひき、下り坂、東、声、し、て、朕、は、毛、植、武、天、皇、第、三、世、
高見王の嫡子と。高望王の孫、衣、龍、を、帝、子、と、出、て、僅、又、六、世、昭、穆、未、

遠くらば、閑威を、新、皇、帝、将、門、の、衣、龍、の、御、衣、る、小、匹、夫、下、郎、の、
散、本、ども、杜、女、夜、発、の、馬、骨、木、が、朕、を、圖、さ、く、の、の、く、し、く、牙、の、う、へ、
語、へ、不、敬、ら、う、と、嗚、呼、と、罵、ま、は、見、基、先、生、冷、笑、ひ、風、流、の、席、
あ、の、貴、賤、と、ら、ぶ、況、て、巾、邊、が、主、と、我、に、将、門、八、世、を、駭、く、る、逆、臣、も、れ、
ども、身、後、小、その、靈、を、宥、ら、ま、し、ん、朝、廷、の、恩、澤、あ、し、と、あ、う、が、死、
幸、ひ、ら、ぶ、や、ま、づ、閑、び、ま、さ、る、の、と、あ、ま、不、佞、嘗、今、昔、物、語、神、皇、
正、統、紀、本、を、閑、し、て、粗、お、門、の、の、の、の、の、と、い、ども、その、文、者、略、め、て、
い、ま、ご、俗、説、を、辨、じ、る、小、足、ら、ぶ、又、大、鏡、未、雀、の、段、あ、お、さ、う、ご、が、み、
これ、出、て、ま、ま、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
ま、く、ら、む、し、小、説、者、の、意、匠、より、出、て、実、る、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
問、ん、将、門、當、時、閑、左、八、州、を、掠、奪、し、て、漫、は、偽、号、を、唱、る、が、ら、平、

親王と稱せし。野人の臆。見識卑し。是疑ふべし。このひひは
 将門。七人の陰武者あり。或はつゝ将門分身とて。七人の形状を顕せり。よろそ
 何と真の将門の状をば。あは秀郷竊人として。平親王は美女を
 贈じ。是を闇者として。その真偽を標する。小。痺谷の勤りの。真の将門
 あり。と告ぐ。秀郷は。是を射ておとす。かくてその首級を京師へ
 のせて。着首せられし。ある人。是をえり。将門ハ米りよりぞ。切られ
 り。俵者太が。とる。とよみ。は。と。或ハ秀郷。流り。と。
 将門の妻と密通し。その真偽とある。も。是疑ふべし。の。或ハ
 つ。将門元來謀叛のころあり。貞盛。是を捕し。殺し。と。ふ。果さば。
 この比。将門。京。あり。伊豫の。比。友。と。比。敷。山。は。未。会。し。て。平。安。京。を。直。下。し。
 密に逆意を相詰ひ。と。疑ふべし。の。三。つ。つ。或ハ秀郷。その。始。

将門が武勇とすて。その手小属を。と。ひて。下。後。は。赴。き。て。対。面。する。小。
 将門。扱。び。て。衣。冠。と。も。整。せ。忙。し。出。立。り。小。言。語。應。答。する。ふ。あ。似。ど。う。づ
 鹿。忽。ち。う。け。し。ば。秀。郷。と。す。と。その。器。ふ。あ。び。と。て。後。て。下。野。へ。立。
 歸。り。更。は。貞。盛。朝。臣。を。削。て。大。功。を。ま。し。と。と。疑ふべし。の。四。つ。
 或。は。の。と。め。六。郎。公。連。將。門。を。練。う。ね。て。死。せ。り。と。是。般。の。比。干。小。異。と。ば
 と。し。と。と。疑ふべし。の。五。つ。或。は。の。將。門。退。治。の。後。九。條。殿。の。沙。汰。と。て。
 大。將。軍。副。將。軍。ホ。勸。賞。の。ま。は。を。執。し。ま。う。と。と。疑ふべし。の。小。野。
 宮。殿。強。副。將。軍。小。功。の。と。稱。し。て。柱。と。と。と。と。部。卿。の。此。賞。
 不。漏。り。面。目。の。て。内。裏。を。退。出。る。が。悪。心。を。發。し。て。天。中。等。地。の。朋。
 なる。大。高。を。放。て。同。勅。を。蒙。り。て。朝。敵。を。碎。く。ふ。一。人。の。賞。を。給。ふ。一。人。と。
 漏。り。是。便。小。野。宮。殿。の。計。ひ。る。と。生。く。世。々。忘。ぶ。ら。彼。人。の。家。門。衰。

徴して未禁永く九條殿の奴婢とるべしと罵りて手をとると打て奉
 と把りりるふ。左右のハッの凡手の甲小徴に血流と出れば紅と齋がど
 宿所は飯て飲食を断て死を果とて思吳と有りてさるる怖れとあり
 け且バ冥と宥まき次べとて神は齊て宇治の雜宮の明神とさるるは是
 といふと或は忠文の思吳宇治の橋姫の神小合とてさるる崇せは
 てりれば圓融院の天延年間京師とてまはるとる人多く失ふといふと
 是疑ふべしとの六つて中述の當時將門が身小著らまはるとるものるればこの
 為俸ととりつてもさるるらんさるるの虚実を辨論とて夜とての
 語りのあつたがごなれた飲会小ゆらとるるさるる卑と論ど巧拙と
 褒貶と眼と瞪ど相罵る疾樂とせんといふところさるる出のひねといふ件
 の執東呵ととら笑ひつ忽地は搖さ出見臺子のこの席とて博士と

稱せられるがらかたくりのよといひ遂にいつとるる。同く而の第一條
 將門既小八箇國とら従へく平親王と偽号とるるありあはる新皇
 帝と稱しとる。されば今昔物語も新皇とまはして或は平親王とも稱
 すと。と記されし後世のさるるあり。よりてさるる將門のり。鞍のり小
 書記とていふと。後の人の小説の事とて實るといふと。これぞさるる
 さるる近属將門記といふ古書。世の中へ人その際略とまはるる
 べ。件の將門記も朱雀院と本皇とも。さるる本皇帝ともまはして
 將門とて新皇と記しとる。こゝに當時の辞とるる。さるるさるる後の人
 皇と稱えと憚あれば平親王とさるる。將門つて親王といふ
 こととさるる。凡五世の王へ人臣小列りて姓と賜るる古例と。又
 一世の王二世三世の王といふとも。姓と賜りしもあり。こゝに嵯峨以降

の源氏小妻より又當今の心子ありとも宣下るけしバ親王とら
稱しなむべ既に親王とてなりやん心子しち小姓あるとるけしバ彼
將門は平朝臣の姓とてけて平親王と稱するに鄙俗の臆め笑ふ
小壇より將門の東藩邊邑の人とてども替く京小ありて執政の家小
扈從したまはかむるののまらざる小ありぬのりみづら親王と偽
稱せば平の姓の除去するん新皇と親王と音相近けしバ世俗流り
て今小平親王といふ歟。且由又まづ凡逆乱の臣とて皇と偽
上志ししに道鏡と法皇と稱し將門より新皇と稱せしめ又
第二條小問々亦の世より七人將門へ七人の陰武者ありしありぬ
又將門が身して七人の形狀ふせせしるもあふと將門の悪を佐する
のへ權守與世王從四位下 村田王の舅藤原玄茂彦治経明坂上遂高藤

原玄明ホあり加以將門の庶兄平將頼舍身平將武とて七人
とふとぬとて將門小芳らとて故不國民とてらら根戻は害物と
七人將門と俾号せしめ又小説小將門が真偽とあらんとて貞盛
秀郷相謀りて人をとりて美人を贈じこの女子が告する小よりと
峠谷の動くの飛將門ありとまりてれば貞盛とて對て又の
誓を報ひ秀郷その首級を返すとらつこの小説と実ることとる
の下の佐倉の海より小お山と唱ふ小山ありとの如く往古將門が
討且一の蹟ありの件のお門へ愛女よ恋ひて本形とあられ終は貞盛秀
郷小妻よりとて最期小深く彼愛女を恨らその女が名を桔梗前と
るんひらるる小至てお門の母より小桔梗生せむ代郊より根と
らし殖ても立地小枯るとらつ凡草木は土地の肥瘦寒湿の不同小

よつて壤小のふとの入る物あり。怪しむ不足るべ。これを若門の怨美小
 附会して桔梗之前といふ美女と云へり出せしむ。と浅きもの。浮世の
 とも。又秀御朝臣が若門の妻小通とて夫の真偽を探りしむ。といふ
 説ハ今昔物語と板せし。注者の説あり。書と引ざればいふ信だ。は
 同書小特門が兵士小平貞盛源護扶ホが妻を拘て新皇門
 としてまづつは云えり。若小護扶と一人の名のまゝ小書写せしむ。傳写
 の誤りも護ハ枝が又まぐ。將門が軍兵よ拘らる。といふ。貞盛朝臣と
 扶朝臣の妻あり。又今昔物語の
 貞盛の妻の返歌と漏り。そのとも亦異同あり。小説は若門の美女
 小惑弱して遂小滅亡せしむ。世俗も又その美女の名ハ桔梗といひ
 るといふ。貞盛朝臣の妻妻のいひの工と詠り傳へるあり。將門記小

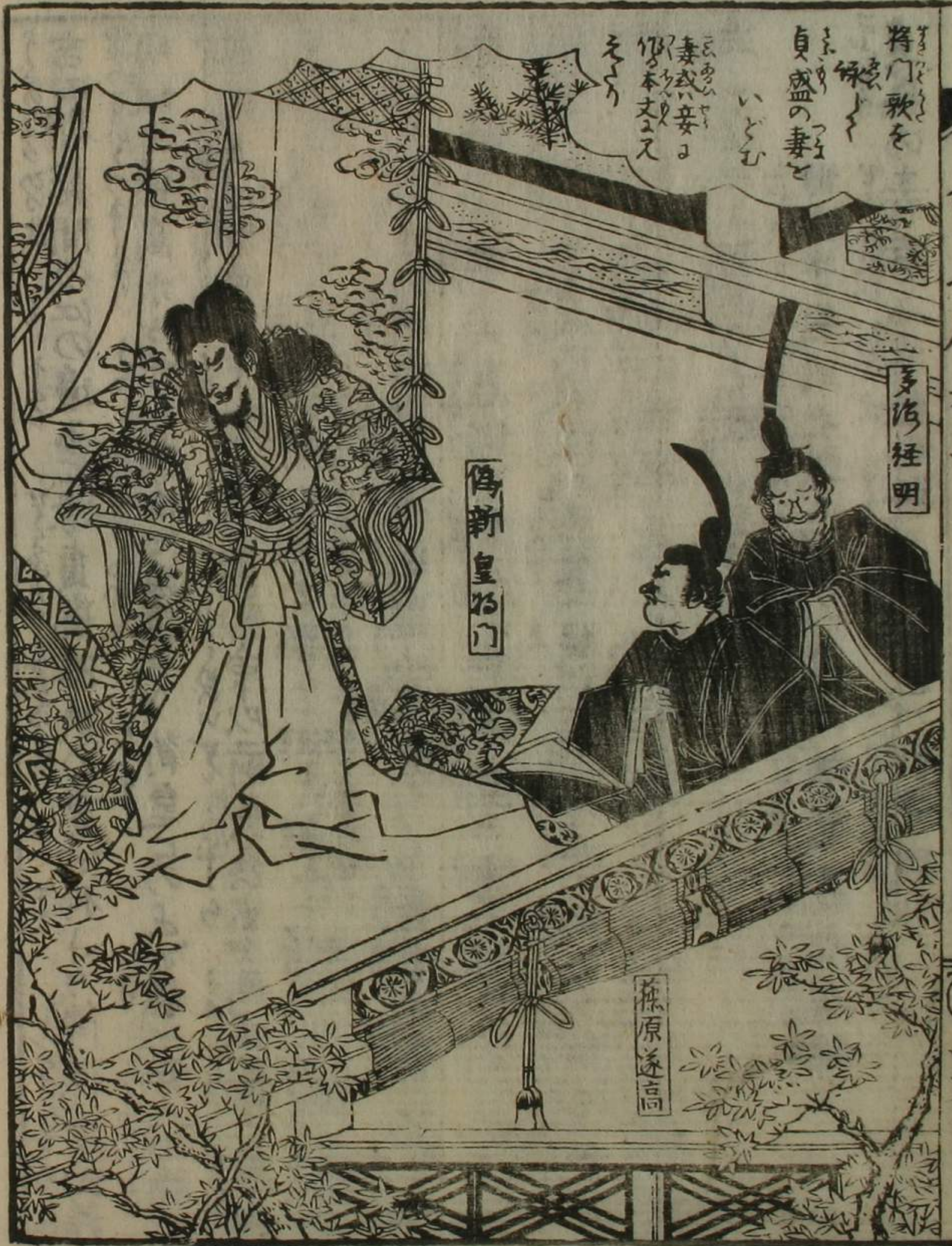
吉田郡 藤間の江の邊にて椽貞盛源扶の妻と拘り陣沃。又治経
 明坂上遂高ホが中ふ彼女と追領り。新皇の工と聴て女人の醜と
 匿え為小勅命と下と。いふ。勅命以前夫兵ホが為小悉く唐領
 せらる。就中貞盛の妻今昔物語はまたたは妻の誤り。刺され體と露して
 せん。いふ。爰小件の陣頭ホ新皇小妻とらる。貞盛の妻と。容顔
 卑しからば願くハ息詔と垂る。とや本貫小遣りといふとせしむ。いふ。
 彩皇勅して女人の流浪ハ本属へ返と。法の例。又鰥寡孤獨
 慢恤を加る。古帝の恒範ありとて一襲を賜てり。又彼女の奉公と試
 為よ。勿心地は勅ありて歌し。まはく。

卍尔手毛風之便丹。吾口問枝離垂花之宿緒
 貞盛の妻幸小息餘の頼小遇ぬま。和之曰。



源氏物語

平負盛妻



將軍歌を
負盛の妻と
いふ
妻或は安日
何本丈又
えり

偽新皇の門

藤原遂高

賀屋座巻三

九

卅尔手毛花白散来者我身和比志止於毛保江奴免

その次小源扶の妻一身の不幸と恥て人小寄て歌てりらる。

花散之我身卒不成吹風皮心卒遭杵物余佐利計田。

この言と既への間人々和怡て逆心脚止ぬとええり。その為体と云ひ

たりと云は魏曹操が冀州と奪とりと死。曹丕真先は城中小進こ

入り。遠熙が妻ある甄氏と掠て遂に后とあつる小仇なり。こまらりの

古書小由と死。負盛秀御共小纏りて将門小美女を抱し。軍略を

懈せしといふ小説の源綱とある小足る人。いふべきものも多る。小且

息と吹くといひつゝかく懐紙りて額の汗を拭ひけり。

昔話質屋庫卷之三終

